

「ただ恵みによって」
ローマの信徒への手紙 3 章 21～31 節

私たちは日々、仕事や家族のために努力し、誰かの役に立とうとする。しかし、成果によって評価される社会の中で、「何かができなければ価値がない」と感じ、自分の正しさを証明しようとすることがある。その思いは信仰生活にも入り込み、熱心に祈り、奉仕しなければ神に愛されないという不安を生む。

宗教改革者ルターも、神の前で正しくありたいと願い、祈り、罪を告白したが、平安を得られなかった。自分の罪を見つめるほど、神の義は罪人を裁く恐ろしいものに思えた。しかし聖書を通して、人は努力によってではなく、神の恵みによって義とされ、その恵みを信仰によって受け取るという福音を再発見した。

パウロはローマの信徒への手紙で、すべての人が罪のもとにあると語る。罪とは単なる悪事ではなく、神との本来の関係を失い、自分を中心として生きることでもある。善い行いを積み重ねても、その破れを自分の力で回復することはできない。ところがパウロは「ところが今や」と告げる。人間の行いによらず、神がキリストによって救いの道を開いてくださったのである。それは聖書の約束の実現である。

「義とされる」とは、罪のない立派な人になることではない。罪人である私たちを、神がキリストのゆえに正しい者として認め、御自分との関係に迎え入れてくださることである。キリストは、自分の力では罪から自由になれない私たちを贖ってくださった。その救いは無償で与えられる。しかし、何の犠牲もなかったわけではない。神は罪を軽く見過ごさず、御子を与え、キリストは十字架で命をささげられた。そこに、罪人をなお愛される神の計り知れない恵みが示されている。

私たちはこの恵みを信仰によって受け取る。しかし、救いを決めるのは信仰の強さではない。信仰は、神が差し出してくださる恵みを受け取る「からっぽの手」にたとえられる。その手が迷いや不安で震えていてもよい。私たちを救うのは、私たちの手の強さではなく、支えてくださる神の御手の確かさだからである。

救いが恵みなら、誰も自分の功績を誇ることはできない。神の恵みの前では、人を分け隔てることもできない。教会も、信仰歴や奉仕の多さで人の価値を測る場所ではない。弱さを抱える者同士が、同じ恵みによって生かされ、共に礼拝する場所である。

恵みによって救われることは、神の教えを無意味にすることではない。信仰による救いは聖書の約束を実現し、私たちの生き方の出発点を変える。愛されるために祈り、奉仕し、隣人を愛するのではない。すでに愛されているからこそ、感謝をもって祈り、仕え、愛を分かち合う。善い行いは救いの代金ではなく、恵みから生まれる実りである。

「ところが今や」。神は、キリストの十字架と復活によって救いを開かれた。弱さや迷いを抱えた私たちは、その確かな愛に支えられ、新しく歩み始める。「ただ恵みによって」。この福音こそ、私たちの救いであり、喜びであり、希望なのである。